

平井尚志の なめとこ山通信



第66回 鷲田清一「思考の肺活量」を読む

皆さんこんにちは。新型コロナウイルス、オミクロン株の猛威が衰えませんが、いかがお過ごしでしょうか。私の勤める学校でも、生徒からPCR検査陽性者が出たり、濃厚接触者として教員も休まざるをえなくなったりと、大変な状況が続いています。2月になったら、東京都が緊急事態宣言を要請するという話も出ていますが、さて、いったいどうなるのでしょうか。明けない夜はないように、やまない雨はないように、きっとまたいつか、皆で普通に会える日は来ると信じて、どうぞ皆さんお元気でいてください。

さて、今回のなめとこ山通信は、本当にネタに困ったのですが、私の勤務校の高校3年生の年度末授業で、鷲田清一の「思考の肺活量」という文章を勉強していて、ついでにここでも紙上授業をしちゃえと、安直に考えてしまいました。ただ、鷲田清一さんは侮れません。なかなか大事なことを言っていますので、どうぞ学生時代を思い出していただき、ふんふんなるほどと、筆者の言いたいことを考察してみてください。わからないことはわからないままに、というのがこの授業のキーワードです。それでは、始めます。

「思考の肺活量」の本文は、鷲田さんの著作『哲学の使い方』（岩波新書 2014年刊）から、高校生にもわかりやすい部分を抜き出して教科書に採択された文章です。本来はもう少し難しい話も前後に控えているのですが、教科書本文はほんの数ページで、生徒もきっとスイスイ読めたものと思われま

す。「人が哲学に焦がれるのは、今の自分の道具立てでは自分が今直面している問題がうまく解けない時である。」で始まる教科書本文では、哲学とはなんぞやが語られるのではなく、哲学という手段を使ってどのように考えを進めることが「思考の原型」であるのか、が語られます。例えば、政治的な思考においては、「不可欠の政策AとBがあるとして」「Aに先に手を付けるのか、Bを先に実行するのか、それを手遅れになることなく決定しなければならない。けれどもいずれが有効か、誰も見通せているわけではない。見通せないけれども決断しなければならないのだ。つまり、結果が分からないまま、分からないことに正確に対応するという、それが政治的思考には求められる」のだと指摘します。この文章は2014年に書かれたものですが、今まさに政治は、経済対策を行うべきか、コロナ対策を執るべきかで、誰も正解がわからないままに決断を迫られている状況と言えるでしょう。授業を聞いている生徒たちも、鷲田さんの言わんとすることは飲み込めたようです。「だいじなことほどすぐには答えが出な」くて、



だから私たちがなすべき重要なこととは、「分からないけれどもこれはだいじということを見だし、そしてそのことに、分からないまま正確に対処すること」なのです。鷺田さんはそのことを、言葉を替えて繰り返し繰り返し述べています。その時、つまり「ああでもない、こうでもない、あくまで論理的に問いを問い続けるそのプロセスを歩み抜く」時に、いわば「思考の肺活量」とも言うべき、「すぐには分からないことに分からないまま付き合う思考の体力」が必要とされると鷺田さんは言うのです。なぜなら、「だいじなことほどすぐには答えが出ない」し、「そもそも答えの出ないことだってある」からです。考えて考えて、わからなくても逃げずに、耐えて、「いわば潜水し続けるということ」が、現代の人には必要だと鷺田さんは言うのでした。

そのことはなんだか、先日、南アフリカから吉村さんがおっしゃっていたことに通じるような気がしました。時代の趨勢は、物事をわかりやすい論理にくるんでしまおうとしたり、多くの人はわかりやすい言葉や説明に流れてしまいがちです。でも、本当に大事なことは、何だろうかなぜだろうかと探求し続け、その中で正確な対処をしていくことなのだ、と鷺田さんは「思考の肺活量」という文章の中で言っていますし、吉村さんが南アフリカから私たちに投げかけてくださった言葉もまた、そのようなことであったかなあと私は思ったのでした。

鷺田さんが、本当に大事なこととして繰り返し言っていることを、三つにまとめてみました。ここはテストに出るかもしれませんよ。(笑)

- ・わからないもの、正解がないものに、わからないまま、正解がないまま、正確に対処すること。
- ・困難な問題に直面したときには、すぐに結論を出さず、思考の肺活量を使うこと。
- ・ある事態に直面して、これは絶対手放してはならないものなのか、なくてもよいものなのか、きちっと見極める力を持つこと。

「思考の肺活量」を、高校3年生の最後の国語の授業で教えていて、「もっともっと考えようよ。」という言葉を生徒たちに送りたいって思いました。生徒の中にはこの3月に卒業して、就職する生徒もいて、だからもう国語というものを勉強することはないという生徒もいます。国語という授業で何を学ぶかは、生徒の「何だろう？」と思う「思考の肺活量」次第、なのかなあと思ったりもするのです。

最近、以前に読んだ村上春樹の短編小説を読み返していて、こんな言葉に出会いました。

「かたちのあるものと、かたちのないものと、どちらかを選ばなくちゃならないとしたら、かたちのないものを選べ。それが僕のルールです。壁に突きあたったときにはいつもそのルールに従ってきたし、長い目で見ればそれが良い結果を生んだと思う。そのときはきつかったとしてもね。」

かたちのあるものと、かたちのないものと、一概には言えませんが、かたちのあるものの方が、わかりやすいものであるように思います。人はつい、わかりやすい方に惹かれがちですが、人生を処するヒントは、わからない方に進むことなのかもしれません。でも、学校の生徒にはそんなことは教えませんが。今回は、冒険学校の皆さんへの、特別授業として、自分の言いたいことも最後にお話しさせていただきました。短くって、申し訳ありません。ありがとうございました。